
Story of princess in sea～海の姫の物語～

宮芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Story of princess in sea（海の姫の物語）

【Nコード】

N2680P

【作者名】

宮芙蓉

【あらすじ】

ある島に少女がいた。少し気が弱くて人見知りだが、どこにでもいる普通の少女だ。表面上は。彼女には秘密がある。物心がついた時からある夢を見ていた。その中で出会った魚と、少女二人だけの秘密。その秘密は周りを巻き込みながら大きく彼女の人生を変えていく。悲しい運命に立ち向い、傷つきながらも懸命に生きて自分の優しさを尽くす少女はとても強くて美しい。「若干残酷な描写が入りますが、大したことはないのでR15にしました。自己満小説に

ならないようにと努力をしていますが、作者の力量が低いためこのような仕様となっています。ご了承下さい。何かあれば感想等に随時書いてください。作者が必要だと感じれば、すぐに対応させていただきます。長くなりますが、よろしく願います」

序章

海は幸福に満ちていた。

海には美しい世界が広がっている。

海の楽園はもうなくなった。

海には沢山の生き物がいる。

海の支配者はすでにいなくなった。

海に2つの、大きな力を持つ真珠が産まれる。

海を守る者は力を失った。

昔、海を愛した魔女がいた。

海を闇に染めた者は、ただの怪物と化す。

海にはお姫様がいた。

海を救った者は、すでに海に還った後。

海は誰のものでもなくなった。

海は自由。

海は無防備。

海は求めている。

使命を受け入れることのできる“もの”を。

運命から逃れることのできる“もの”を。

揺らめく世界

体がとても軽い。

まるで宙に浮いているようだ。普段から拘束具のように体に絡み付いていた重力から解放されたようだった。

先ほどまでとは違い、気持ちまでも軽くなったようだ。

少女は自分の足が地面に付いていないことに気づくのにあまり時間を必要とはしなかった。それは毎日のことで、もう慣れていたから。そもそも、今の彼女に足と呼べるものはなかった。

口からこぼりといくつかの泡が零れ、空を目指して登って行く。

上を見ると、太陽の光を浴びた水面がゆらゆらと揺れ、美しい光の芸術を作り出していた。少女はそれを目を細めて眺めた。

「こっち」

声がした。

男なのか女なのか、いまいち判然としない。あやふやでいて、ふわふわとしていた。

それは人ですらない者の声だと知っている少女は、性別など考えなくても意味はないのだと思った。

「こっち」

少女は尾を揺らし、声のする方向へと泳ぐ。

小さい頃は尾の使い方も解らず、教えて貰うまでただ下に落ちて目的の場所には地面を這って進んでいた。今では泳ぎは得意となり、後方回転などの少しコツがある泳ぎもできるようになった。

少女は尾を使って泳ぐことがとても好きだ。

この世界を構成している、清らかで気持ちの良い水が体を撫でる。口を開けると、塩の味が舌をくすぐった。

声はいつも同じ場所からしていた。

この世界の1番下にある洞窟の中から聞こえてくる。そこに生えている光る水草が中を明るく照らしていた。

洞窟の奥は広い。と言っても、広げた手の2、3メートルほど先に壁があるので、見る人によれば狭いと感じるかも知れない。

壁には所々、水草の発する光を反射してエメラルドの輝きを放つ石が埋まっていた。もしかしたらそれは何かの宝石なのかも知れない。

そんなどうくつの中央に、1匹の魚がいた。

黒く鈍い光を放つ真珠のような瞳は、感情を読み取られることを拒むかのように揺れない。

鰭は高価な金魚のもののように大きくて、水の流れによって柔らかく揺らいでいる。まるで天女が羽衣を纏っているかのようだ。

鯱のように滑らかで流れるような美しい身体はエメラルドグリーンの鱗で覆われ、表面をマリンブルーの薄い光の膜が包んでいる。

少女は、魚の形をした海のように思えた。

「こんばんは。あるいは外の世界ではもうおはようかな？」

いつも会って1番初めに聞く文句。

それは優しさを帯びていて、彼あるいは彼女——シーマにとって少女に会うことがとても嬉しいのだと読み取れた。

「今日は君に知らせたいことがあるんだ。とても大切なことだから、良く聞いて欲しい」

少女は何？ と聞く変わりに首を傾げる。声を出すことの出来ない彼女はいつも身振り手振りで自分の気持ちをシーマに伝えていた。シーマは少女の気持ちに答えるかのように言葉を続けた。

「君はこれから、大きな運命の岐路に立たされることになる」

シーマの声はとても静かで落ち着いていた。だからこそ、少女の心に深く重く響く。

「何をするか、どんな未来を選ぶかは当然君次第だ。だが、それによつて君や、君の周りの今後が決まってくる。最初は小さなことだが、それを軸に周りを巻き込みいずれは大きな渦になるだろう。巻き込まれた者は無傷では済まない。中心にいる君はもっと傷だらけになる。そうならないために君は考え、行動し、誰よりも自分の心をズタズタに引き裂かなければならない。それが君の運命だ」

少女はシーマの言葉の意味が良く解らなかった。突然運命だ何だのと言われても、今一理解できない。

少女はその気持ちを現すために首を傾げた。

「そうだね。いきなりそんなことを言われても解らないよね。だけど時間がないんだ。だからそのまま聞いて欲しい」

少女はその穏やかさの中に焦った色が滲む声を聞き、もう遮らないようにしようと肯定の意味で頷く。

それを見たシーマは、安心したように言葉を続けた。

「だけど、逃げるという選択肢もあるんだよ。君が生まれ育ったこの島を出れば、長い長い時間の流れの中の、ほんの小さな人間の人生だから君は一生を幸福に過ごすことができるだろう。だがその時は、この島は大きな波に飲まれて沈む。だから、考えて欲しいんだ。自分の進む道を考えて考えて考えて、その上で決めて欲しい。何を犠牲にして、何を守るかを。今は私が何を言っているのか解らないだろうけれど、いずれ解るときが必ず来るから、決めるのはその時でいいんだ。それまでに、心の準備だけでも思って今日は君にこんなことを話したんだよ」

世界が揺らいだ。

まるで明かりを下げるかのように、段々と辺りが暗くなっていく。

「もう時間のようだね。君とここで会えるのも今日までのようだ。夢から覚めると運命が回りだす。深く入り込めばもう逃げることは許されない。だから、何をするかは自分で選んでくれ」

声の大きさが段々と小さくなる。まるで少女とシーマの間にある見えない壁が分厚くなって行くかのように。

「さようなら。だけどまたすぐに会えるから。その時は君の声を聞けて、君の名前を知ることができる。それはとても楽しみなことだよ」

楽しみだと言っているが、声音は悲しそうに少し震えていると少女は思った。

「次は地上で会うことになるね。その時は君の歌を聞かせて欲しい。私は君の声がとても好きだから――」

世界が暗くなり、消えて行く。少女の意識も元の場所へと帰って行く。

意識が離れる寸前、シーマがごめんねと小さく言った言葉が少女の耳に届いた。

夢への回想

朝目を覚ますと、目の前に見えるのは無機質な洞窟や神秘的に光る魚ではなく、和の温もりを感じさせる板張りの天井。

前髪が横一直線に切り揃えられている長髪の少女――鱗箱冬優（そりはこふゆ）は、カーテンを開き、窓を開けて新鮮な外の空気を自分の部屋に取り込んだ。

冬優は、んーと背伸びをし、夢の中のことを思い出す。

不思議な夢を見た。

自分が人魚になり、光るとても美しい魚が自分に話しかけてくる夢だ。

そこでの夢は彼女にとってただの夢ではなく、楽しいとても大切な一時であった。

冬優はその夢を毎日のように見ている。

1番始めに見たときのことは覚えていないが、それは彼女が物心付いた時にはすでに、夢の中で出会ったシーマと一緒にいたからだ。

彼女が最も古い6才の頃の記憶のには、すでにシーマが夢の中にいた。そして何故かシーマの名前も知っていた。

もしかしたら彼女が物心つく前にシーマが自分の名前を教え、それを覚えていただけなのかも知れない。あるいはシーマは彼女が夢の中で作り出した架空のキャラクターだからなのかも知れない。

そもそも夢とは、睡眠中に起こる、知覚現象を通して現実ではない仮想的な体験を体感する現象をさす。

つまり嘘ということ。

冬優が人魚になったことも、水の中で息をして泳いだことも、そしてシーマと出会ったことも全て架空の世界の中の絵空事なのだ。

だからシーマは実在していないし、彼女も本当に人魚になれた訳ではない。彼女も頭ではその事を十分分かってはいるが、心の奥底ではそれを否定していた。

シーマは本当に実在し、そして自分は人魚になった。

それが事実であるような気がして、冬優は思わず笑ってしまう。

冬優は今まで他の人が見てきたような夢を見たことがないのだ。

自分の夢と他人の夢。

それは絶対に比べることはできない。

自分の夢は自分だけのもので、彼女の世界は彼女だけのものだった。

入学式に春風を

柔らかい太陽の光は全てのものを優しく包み、じっとしていれば思わずうとうとと眠ってしまおうだろう。

そんな日和に、海沿いの道をゆっくりと艦箱冬優は歩いていた。

冬優の今の服装は、上は紺色のセーターの上からそれよりも同色だが暗い色調をしたブレザー、首元には赤い可愛いリボンをしている。

下は、膝まで長さのあるスカートはブレザーと同じ色の上にチェックの柄が入った制服を着ている。それは左右の下の方で密編みにした髪型と相まって、彼女の真面目な性格を際立たせた。

ローファーは今朝下ろしたばかりでまだ靴擦れができそうなほど硬く、冬優は慣れていないためこちなく歩いていた。

学校指定の黒色の鞆は、小学校と中学生では自由だったため、いかに高校生という感じがして彼女は少し照れる思いだった。

そう、彼女は高校生になるのだ。

今日は入学式。

真新しい制服に身を包み、今までとは違う通学路を通って冬優はこれから通うことになる翔星高校へと向かう。

これからの新しい学校生活に、不安や心配を覚え、冬優は少し緊張した面持ちである。

勉強についていけるのか、授業はどのようなものがあるのか、担任の先生は良い人なのか、そして、新しい同級生と仲良くできるのか。

考えれば考えるほど気持ちが落ち込む。

そんなネガティブな自分が嫌で、彼女はこれ以上考えないようにするために、海を見た。

冬優が今歩いている道の仕切りを跨ぐとすぐそこに砂浜があり、その向こうには果てしなく続く海が蒼く輝いていた。

冬優はとても大きく美しい海を見ていると不安が消え、不思議と安心感で満たされる。まるで信頼できる者が側にいるような、そんな気持ちだ。

ふと、冬優は視線を前に向けた。

数メートル先に彼女と同じ制服に身を包んだ少女おり、思わず足を止める。

理由は同じ学校に通うことになる少女がいたからではない。別にあった。

鞆を持っていない方の手には白い包帯が巻かれ、スカートの下から伸びる足にも包帯が巻かれていた。

顔に掛かった髪が潮風に揺れ、隙間から顔の右半分を覆う黒くて大きな眼帯が見えた。それは白くて綺麗な肌を持つ少女には対極の存在だったが、それが逆にアクセントになり彼女の美しさを際立たせた。

同じ女の冬優をも見惚れさせる美しさを目の前の少女は有していた。

少女は事故にでもあったのだろうか。

冬優は体に巻かれている包帯の多さに驚いたが、すぐに別の事が気になった。

少女は海の方をまっすぐに見つめている少女の瞳。それはどこか睨んでいるようにも冬優には思えた。

冬優は彼女の視線の先に何かあるのかと思い見てみたが、とても広い海と空を飛んでいる鳥がいるだけである。

少女はもしかしたらそのどちらかを見ているのかと思ったが、すぐにその考えを冬優は否定した。否定はしたもの、冬優には彼女が何を見ているのか全く分からないが、彼女が自分には見えない何かを見ているようだった。

不意に少女がこちらを向き、冬優と目が合った。

少女の黒く深い瞳に見詰められ、冬優は思わず緊張する。

少女はしばらく冬優を見た後、何事もなかったかのように歩き出した。

冬優はしばらくぼーっとしていたが、学校からチャイムが鳴ったため慌てて走り出した。

＋％＋％＋％＋％＋

入学式真っ只中の体育館の中はとても寂しい状態だった。人が来ていないという訳ではなく、元々人がいないのだ。

今年、この翔星高校の新１年生は現在の２年生３年生に比べると生徒数は比較的多い方なのだが、それでも１００人に満たない。入学式の為に集まった先生を合わせても、１００行くか行かないかだろう。

この高校がある島には子供が少なく、年々過疎化進んでいる。理由は簡単だ。本土の方が利便性に富んでおり、ここに住むよりも不自由をしないから。

そのため、今では昔からこの土地に住んでいる老人がこの場所に何らかの理由で離れる事ができない大人とその子供、あるいは好きで住んでいる者くらいだ。

理由は大なり小なり違いはあるが、若い者の大半はこの島を離れる事を望んでいる。大学に行くためでもあるし、良い会社に就職するためもあった。

年齢が上の層よりも下の層の方が出ていく割合は大きい。その為出産率も減少し、今では逆ピラミッド状態だ。いつか島から子供がいなくなるのではと危惧する者も出てきていた。

そこで、この問題を解決する為に島の外から子供を呼ぶことにした。

その白羽の矢が立ったのが、年々生徒数が減少傾向にあって廃校を噂させられていた翔星高校だった。

翔星高校に入学すると他の高校よりも利点があるとして、遠く離れた本土から子供を引き寄せようとしたのだ。

その結果、年々翔星高校の生徒数は増え、中には卒業しても島に残る者が出てきた。

少しずつではあるが島の人工が増える事は良いことだということで、翔星高校にこの島の出身ではない生徒を増やすことは今後も続けていくらしい。

今年の新入生の中で元々島の出身は10人もいない。そして体育館にいる新入生は、ざっと冬優が見た限りではその何倍もの人数がいる。

これは高校が様々な工夫をした成果だろう。

もう翔星高校に廃校という結末はほぼあり得ないことになりつつ

あつた。

冬優は辺りを見回していた。

体育館の前の方で先生が話をしていたが、自分がまったく知らない生徒ばかりで緊張しているため悪い事とは思ってはいいても辺りをキョロキョロと見てしまう。

他の生徒も先生の話を聞いている者は少なく、隣の人と話していたり寝ていたり、中にはゲームをしている者もいた。そして校則というものがないせいか髪の毛を染めている者、ピアスを付けている者、髪が床に届きそうなほど長い者がいた。

この学校に人が集まりだしたのも、自由な格好ができるからなのかもしれない。

その中には冬優が今朝見た包帯を巻いた少女の姿もあつた。

元々人が苦手な冬優は、人が多い場所ではおどおどしてしまう。

周りに座っている生徒の殆どを彼女は知らない。そんな中でパイプ椅子に座る彼女は1人孤独なような気がして、怖かった。

次第に周りの視線が気になり、彼女は身動きが取れなくなって全身が強張っていくのを感じた。

その時、1人の女性教師と目が合った。

腰下までであるであろう髪を頭の後ろでお団子状にした髪型をしている。容姿はとても美しかった。

深い、全てを見透かすかのような瞳が真っ直ぐに冬優を見つめる。そして、柔らかく目を細めた。

まるで、緊張しなくても大丈夫だよと、優しく言っているようだ

った。

冬優は彼女のお陰で、自分の緊張がゆっくりと解けていくのを感じた。

司会進行役の教師が、次は校長先生の話と言ったとき、今まで冬優を見つめていた女性教師が立ち上がり、ステージの上まで歩いて行った。

その姿はとても美しく気品があり、まるで彼女には重力というものがないのではないかというほど軽やかだった。ヒールを履いているはずなのだが、足音さえしない。

冬優は彼女が校長先生だという事に驚いた。

彼女は多く見積もっても、年は20代前半にしか見えない。

校長先生には女性もなれるのだろうか、それは全て初老の者になるものだと冬優は思っていた。若くてもなれるのだと、この時初めて知った。

校長先生の話しは形式的なものであった。

始めに挨拶から始まり、高校生とはなんなのかや高校生活で何が大切で何をしないではいけないのかなど、つまらないものであった。冬優の隣に座っていた男子生徒も眠そうに大きな欠伸をしている。他にも、真面目に聞かないで隣の人と話していたり、中には隠れて本を読んだりゲームをしている者もいた。

だが、内容はつまらないが、校長先生の声はとても美しかった。小鳥の囀りのように可愛らしく、小川のせせらぎのように心地好い、聞いているだけで心に染み込むような透き通った声である。

隣にいた男子生徒も今では眠そうにはいなく、真っ直ぐに校長先生を見て真剣に話を聞いていた。他の生徒も同じように彼女の

話しに耳を傾けている。

校長先生は話し終わると満足そうにステージを下りた。

冬優は少し頭がぼうつとしていた。彼女が話した高校生が守らなければならない規則が頭を巡り、これらのことは全て必ず守らなければならない気がした。

まるで魔法に掛かったようである。

その時だ。

冬優の後ろの方から大きなバンツという乱暴な音が聞こえた。

目が覚めたようにはっとして後ろを振り向くと体育館の扉が開いており、そこには苦しそうに肩を上下させて息をする少年が立っていた。

翔星高校の制服の紺色のブレザーを着ている為、ここの生徒なのだとすぐに分かった。頭には黒い帽子を目深に被っており、その下から覗くのは雪のように白い髪だった。

校則のないこの学校では髪を白に染めていようが帽子を被っていようが問題にはならないのだろう。

「新学期そうそう、遅刻してすいませんでした！」

彼はそう体育館中に響く声で叫ぶと、深々と頭を下げた。

周りにいる生徒からクスクスという笑い声が漏れる。

先生達を見ると、眉間にシワを寄せる者や大きな溜め息を漏らす者など不愉快極まりないといった感情を表に出す者が多かった。

ただ1人だけ、悪戯がばれた少女のように可愛らしく舌を出して、

隣の白衣の男性教師に笑って見せたのは校長先生だ。

少年が開けた扉から柔らかな暖かい風が流れてきて、冬優の髪をそっと揺らした。

冬優はシーマが言っていた運命の断片を垣間見ていたと、心の角で微かに感じていた。

夕色の池

翔星高校の門の前には桜の木が並ぶ通りがある。

コンクリートで舗装された道の上にはまばらに桜の花弁が落ちており、見上げれば満開の桜が咲き誇っていた。

まだしばらく桜を楽しむ事ができそうである。

冬優は入学式が終わり、桜並木通りを親友の稲生愛（いのりあい）と歩いていた。

肩上まであるボブカットの髪型が特徴的で、大きな瞳はとても可愛らしい。冬優は彼女ならテレビで輝いているアイドルにも負けない容姿を持っていると思っていた。

「冬優、入学式の時凄く緊張していたね。大丈夫だった？」

「うん、ありがとう。大丈夫だよ」

愛は心配そうな表情だったが、冬優の言葉で安心したように表情を和らげた。

冬優は入学式には遅れはしなかったが、遅い方であった。しかし、来た者から座るようになっていく席順だったが、彼女は真ん中辺りの席だった。

彼女よりも遅く来た生徒は多く、愛もその中の1人だった。

会話できるほど近くはなかったが、愛が彼女を見るには十分な距離だったのだろう。

彼女が緊張で体を強張らせているのが見えて、愛は心配してくれたのかもしれない。

「ねえ、愛。このあと空いてる？」

「あたしこのあと用事があるんだ。ごめんね」

「そうなんだね」

「本当にごめんね」

「ううん、全然良いよ。大した事じゃないから大丈夫だよ」

愛が本当に済まなさそうに謝ったので、冬優は慌てて手を振って
何でもないという顔を作った。

だが、内心冬優はとても残念だった。

最近何故か愛は忙しいようで、中学を卒業してから休みは長い間
あったが合えた日数はあまり多くはなかった。遊んだのも数える程
しかない。

今日は入学式で学校が早く終わった為、もしかしたら愛と遊べる
かと期待していた。もし無理なら昼食は一緒にと思っていたが、愛
の様子を見るとそれも無理なようだ。

「明日なら大丈夫だよ。土曜日で学校も休みだから、冬優が良けれ
ば明日の朝から遊びに行かない？ 新しくできた店を知っているか
らそこ行こ」

「うん」

冬優は嬉しかった。

久しぶりに愛と一緒にいられるのが楽しみで、明日が待ち遠しい
思いであった。

海岸沿いの道まで来ると、今朝見た包帯の少女が砂浜に佇んでまた海を眺めていた。

少し気になったが、愛がいたので冬優は彼女から視線を外した。

冬優と愛の家は近い。歩いて10分と掛からない。

その為冬優が今朝電話して一緒に学校に行こうと誘ったが、やる事があるからできないと愛は断った。

放課後は一緒に帰れるようだが、少し残念であった。

中学までは2人はいつも一緒であった。

朝登校する時も夕方帰宅する時もいつも一緒に、放課後は門限の6時までずっと2人は遊んでいた。

休みは朝から日が暮れるまで一緒に遊んでいた。2人を知らない人が見れば姉妹だと思っただろう。

それほど仲が良かった。

昔はいつまでも変わらず一緒だと思っていた。

これからもずっと変わらないと思っていた。

「あたし、寄るところあるからあっち行くね」

愛が示した曲がれ道は島の中央にある山に繋がっている。その道を真っ直ぐに行けば神社があった。

毎年お正月などの時期が来るとお参りに行っていた為、冬優は道を覚えていた。

「うん」

何の用事が冬優は聞きたかったが、なんとなく深く聞いてはいけ

ない気がして、冬優は頷くだけにした。

「ばいばい、また明日ね」

「バイバイ、また明日」

そう言うのと、愛は振り返りもせず曲がれ道の奥へと姿を消した。冬優は彼女の姿が見えなくなるまで手を振った。

1人残され、少し、冬優は寂しい気持ちになった。

＋％＋％＋％＋％＋

土と木が入り交じった匂いは町の臭いとは違って清んでおり、胸一杯に吸い込むと心地よく、気分が落ち着く。

舗装されていない剥き出しの地面を一步一步踏みしめるたびに、自然のエネルギーが足を伝って体の中に取り込まれるようだった。鳥の囀りがすぐ傍から聞こえる。姿を見たいと思い探してみるがやはり簡単には見つからない。

冬優は上を見上げた。

密集した木々の隙間から見えるのは夕日色に染まる空であった。

足下は暗くてあまり見えず、毎日通る道とはいえ危なく感じる。もうすぐこの辺りは暗闇に包まれるだろう。冬優は持ってきていた懐中電灯の明かりを付け足下を照らす。

時々地面から太い木の根が飛び出しているのが見えた。

冬優は今山の中を歩いていた。

島の真ん中にある、深い森が広がる山だ。

その中心には池があり、彼女はそこへ向かっていた。

いつもは深夜、家族が寝てしまってからこっそりと冬優は家を抜け出して池へと向かっていた。

だが今日は日が沈まない内から池へと向かっている。

いつもと同じ行動をしなかった理由は特にはない。もしかしたら親友の愛と一緒に遊べなかったから暇だったのかもしれない。

あるいは予感というものがあったのかもしれない。
ただなんとなくであった。

すぐに池が見えた。

向こう岸がはっきりと見えるほどの広さしかない。

水が澄んでいるため中がよく見えた。だが、大切なものを隠そうとするかのように底の方は暗い。辺りが薄暗くなってきた今はいつものよりも余計に池の底は見えない。

おもむろに冬優は靴と靴下を脱ぎ、足首の辺りまで池の水に浸かる。

池はひやりと冷たく、だがそれが心地好く感じる。

目を閉じると水の清らかさが足の先から頭の先まで伝わるようであった。

一息置いて静かに、胸一杯に空気を吸い込む。

そして声を乗せて、ゆっくりと吐き出す。

夢の中でシーマは冬優の歌が好きだと言ってくれた。

彼女は自分の歌が良いものなのか悪いものなのか分からない。
だが、歌う事がとても好きであった。

歌っている間は心が軽くなり、気持ちが楽くなる。自分が歌によって自然の一部になっているようで気持ちが良くなる。

周りに誰もいないこの池では、一目を気にせずに好きなように歌う事ができた。

冬優は歌詞のない歌を歌う。

歌詞のない歌は冬優の心を自由に映した。

心に沸き上がる声を、彼女は歌で表す。

今の歌は楽しさで溢れていた。

瞼の向こうの世界が夕日色の世界に包まれる。

冬優の歌に呼応するかのようにだんだんとその輝きが増す。

彼女はそれに答えるかのように歌った。

塩の香りがした。

誰かの美しい歌声が冬優の鼓膜を心地好くくすぐる。

それは澄んだ水のように透明で、聞いていて気持ちよくなった。

その歌声は冬優の歌声に絡み合って溶け込み、1つの歌のように紡がれる。

それは会話をしているようでもあった。

2つの歌声が歌になると相手の感情が手に取るように分かる。

そして姿が見えなくてもその相手が誰なのかも。

「シーマ、会いたかったよ」

冬優はそっと瞳を開けた。

目の前には夢の中で出会った、美しく輝く魚がいた。

シーマは天女の羽衣のような綺麗で大きな鰭（ひれ）を漂わせ、宙を浮いていた。

シーマの瞳は相変わらず感情が見えないが、歌を通してシーマも冬優と出会えて嬉しいという気持ちが彼女に伝わっていた。

もう日が沈み、空は闇に包まれていた。

シーマの背後にある色は夕日色に輝いている。

まるで夕日の光がそのまま池に溶け込んでいるようであった。

池の光に照らされ、辺りが昼の様に見渡せる。

だからか、黒い影が木の脇で2人の様子をじっと見ている事に今初めて冬優は気がついた。

その時、影がもうスピードで突進してきた。

だが、シーマの鰭が冬優を包み、影は弾かれた。

シーマの鰭が冬優から離れたとき、数メートル先に黒い影が漂っていた。

厚い唇からはみ出す長くて鋭い牙は、どんなものも噛み付けば引き千切るまで離さないだろう。背や腹、脇や尾から伸びる長い何本もの棘には膜が貼り、鰭のようになっている。

それは1メートルにも満たないが、決して小さいとはいえない、闇を集めて作ったような黒い魚だった。

それは牙を剥き、2人を威嚇して今にもまた襲い掛かりそうな殺気を漂わせている。

「あれ、倒さなきゃいけないんだよね。そうしないと皆が危ない目に合うんだよね」

シーマは夢の中のように言葉を使って返事をしない。

その代わり、シーマのヒレが冬優の頬に触れる。まるで逃げても良いんだよと言っているようであった。

「私がここで逃げたらみんなが困るのなんとなく分かるよ。それに今朝、夢の中でシーマは考えてって言ったよね。でも考えなかったよ。だって、誰かが困るの見たくないし、それにシーマが困っていたら助けたいと思うもん」

冬優は夢の中でシーマが言っていた考えて決める事はしなかった。聞いた瞬間に決めていた。

未来に何が起るかは分からないけれど、運命に立ち向かう事は心に決めていた。

シーマの輝きが増した。同時にシーマの鰭が冬優の全身を包み込む。

その中で、彼女はシーマの温もりを感じた。生まれる前の、母の海の中を思い出す。穏やかで暖かく、心が落ち着く。

鰭が解かれた時、彼女は産まれ変わっていた。

産まれたばかりの姿で七色に光る羽衣を実に纏い、真珠色に輝く長髪は穏やかな海のように揺らめく。晴れた日の、海の色は瞳はどこまでも透き通り、闇をも見透す力を秘めていた。

自分の姿に冬優は驚きはしなかった。

シーマと夢の中にいる時に教えてもらい、産まれ変わった今、これも自分だと思えたからだ。

闇でできた魚が彼女を消そうと迫る。

だが、冬優は腕を軽く上げ、影の魚に触れた。それだけで、それは黒い霧となって跡形も無く消える。

冬優は何も無い闇の中を見つめた。

もう光は無い。

辺りから全ての輝きが消えた。

運命がゆっくりと回り出す。

彼女はそれを自覚した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2680p/>

Story of princess in sea～海の姫の物語～

2011年1月8日11時14分発行